

1991年度下半期報告書

一橋大学山岳部

1. 雪上訓練合宿(富士山)

(11/29~12/1)

メンバー:天羽、田形、寺島、古瀬、和田(以上部員)

山内(OB)・楊・古田

11/29 前日の夜までに、田形・寺島・古瀬・山内・楊は富士吉田駅に入る。駅から五合目の佐藤小屋まで歩く。佐藤小屋に到着したのは12時30分、テント設営後、1時になって雪訓のために上部に向かうが雪が少ないために、七合目辺りには良い場所を見付けることができなかった。この日は結局、雪訓は出来なかった。

11/30 七合目上部で雪訓を行うことにする。初心者もそれほど恐れずに歩行はすることが出来た。ただピッケルストップは、皆、余り上手くこなすことが出来なかった。最後は、スタンディング・アックス・ビレイのスタカットで吉田大沢を途中まで登り、その後は夏道に出て、五合目に下りた。この日に入山の天羽・和田は七合目・八合目までは登って来なかった。田形は、上級生は七合目でツェルトによるビバークをするものと思っていたので、どうしたものかと迷っていたが、結局は下りた。出発前にきちっとした打ち合わせをしておくべきであった。

12/1 八合目付近で再び雪訓を行う。恐れからか、ピッケルストップは余り上手く出来なかった。歩行はまずまずだった。スタンディング・アックス・ビレイもうろ覚えなところが無いようにしたい。途中から、山内・古田は頂上へ向かう。他の部員は雪訓を繰り返す。雪訓終了後、下山開始。例年のように、暗闇の中、富士吉田駅に到着した。

注意点

- ① 最近、雪が少ないという傾向が続いているので雪訓を行える場所が従来よりも上部になって来ている。
- ② 合宿前の打ち合わせを、やるべきところはやるべきである。
- ③ 他大学の報告書を読むと、我々の入山直前に、富士山の頂上で雨が降っているのでも11月末と言えども、必ずフライを持って行くべきである。(文責 田形)

2. 冬合宿(南アルプス・八ヶ岳)

12/20~12/24

12/19 立川⇒穴山⇒御座石鉱泉

12/20 (快晴) 起床 5:00—出発 6:30—燕頭山 9:30—鳳凰小屋 12:30—同発 13:30—地蔵岳 14:15—同発 14:50—鳳凰小屋 15:15(天羽・古瀬は 16:30)

燕頭山を登る途中でアイゼンを着ける。翌日は地蔵岳を廻らずに直接に、小屋から稜線に出るコースを取ろうという考えから、天羽・古瀬が地蔵岳から下りる時に同ルートを偵察する。しかし、雪が深く、余計に時間がかかりそうなので、当初の予定通りのコースを取ることに決定する。

12/21(快晴)

起床 5:00—出発 7:00—稜線上 9:30 夜叉神峠 13:20—夜叉神峠登山口 14:15—甲府＝茅野＝美濃戸口

地藏岳頂上近くから稜線(地藏～観音間)に出る。天気も良く、無事に下山する。夜叉神峠登山口では、ホワイトセールで亡くなられた先輩方と知り合いだった方と偶然出会う。この日、茅野で古瀬の誕生日を祝う。その後、タクシーで美濃戸口まで行く。

12/22(晴) 出発 6:15—赤岳鉱泉 9:20—硫黄岳 11:20—東天狗岳 13:35—黒百合平 14:50

出発してから暫く経って、和田がピッケルを美濃戸口に忘れて来たことに気付き、取りに戻る。全体的に雪はほとんど無く、心配された(?)東天狗岳への登りも、さして危険は無かった。黒百合平から天狗岳が美しく見えた。

12/23(晴のち曇)

起床 5:00—出発 6:30—高見石 7:45—麦草峠 8:40—縞枯山 10:15—三ツ岳 11:35—北横岳 12:30—双子池 14:20

中山峠で日の出を鑑賞。なかなか日が昇ってこず、寒さを我慢して待つ。この日も順調に進み、双子池まで行く。運よく冬期小屋に泊まる事が出来、温かい一夜を過ごす。外は雪が降る。

12/24(曇のち快晴)

起床 5:00—出発 7:00—大河原峠 7:45—蓼科山 9:50—同発 10:50—城の平入り口 12:50: =茅野＝立川

大河原峠付近はだだっ広い。この日は強風であったが蓼科山山頂に着く頃には少し晴れてくる。蓼科山からの下りは急勾配が長く続く。山麓の別荘地を抜け、バス停に着く。(文責 和田)

3. Pre・pre 春合宿(上州武尊山)

3/6～3/13

メンバー 天羽・田形・寺島・古瀬

3/12 立川＝茅野＝美濃戸口＝赤岳鉱泉

難なく入山する。

3/13 (快晴) 起床 5:00—出発 6:30—赤岳 8:35—横岳 10:30—硫黄岳 11:10—赤岳鉱泉 12:15—美濃戸口 14:30

出発に際して、古瀬が「今日は13日の金曜日だ」と、不気味なことを言い出す。少々、気にはかけながら進む。行者小屋のあたりで道を間違えたようで、踏み跡をたどって行くと谷へ入ってしまった。直ぐに左手に見える尾根に登ると、予定の文三郎道に出ることが出来、事無きを得た。たまに風が吹くが、たいしたことはない。雪も少なく、かなりしまっている。文三郎から赤岳への登りとその下りで、アイゼン歩行に慣れない二人が苦しんでいたが無事通過。横岳の通過も風が無く、昨年苦しんだ大同心上部も今回は雪が少なく、道が出来ていて、楽に通ることが出来た。あまりに楽すぎて、力が余り、硫黄岳から赤岳鉱泉への下りで変な道を通ってしまい、崖の上部に出て、懸垂下降する一幕もあったが、「13日の金曜日」に似合わない楽しい山行であった。また、冬合宿で余り使わなかったアイゼンのトレーニングも出来、なかなか良かった。(文責 天羽)

4. 春合宿(谷川山系:白毛門—朝日岳—清水峠—谷川岳)

3/19~3/23

メンバー 天羽・田形・寺島・古瀬

3/18 起床 4:30(雪)—土合駅出発 6:00—白毛門 10:25—笠が岳 11:35—朝日岳 12:50—J.P.13:30(曇)—J.P.13:20(晴)

小雪の中、土合駅を出発。夏道と少々違い、三菱山荘のすぐ横から尾根に取り付く。激しいラッセルの予定だったが、雪が少なく、輪カンを外して進む。迷うような所はない。白毛門手前の直登もクラストしていて雪崩の心配はなさそうだ。そこで上級生二人はアイゼンを着けながら、一足先に着けていた寺島、古瀬が登って来るのを見ていた。二人が坂の途中で止まっているので待っていてくれるのかと思ひ、追いつくと、アイゼン歩行に慣れない二人は、進むに進めなくなつたらしい。なるほどと思ひながら、牽き連れて登る。晴れば、谷川岳が眼前に広がるはずなのに、ガスの中では全然感動しない。続く、笠が岳の登りは、ガスの中、登れど登れど同じようななだらかな坂が延々と続き、非常に気が滅入ってしまった。山頂の先にある小さな避難小屋は、雪から出ていたが、扉が中から石で押さえつけられてあり、何のための避難小屋か、良く判らない。それでもなんとか風よけにして休み、朝日岳へ向かう。途中、何本か篠竹をさすが、過去三回も通った道なので迷わず朝日岳に着く。ここも真っ白な世界で余り嬉しくない。予定ではここで泊まりだったが、時間があつたので、先に進む。朝日岳の広い尾根を、先程は登りで窮していた古瀬がコンパス片手にどンドン行き、すぐに J.P.に着いた。J.P.から清水峠はやせ尾根で、しかも視界が全く効かなかつたので、ピッケルで、尾根の限界との距離をとりながら進む。すると崖とすれすれの所に、アイゼンが外れたと言って田形が腰を下ろしてしまい、肝を冷やした。人の後をついてきた田形は、どんな所を歩いているのか全く知らなかつたようで平然としていた。その後、偵察の不備から進んでいる道に自信がもてなくなり。時間的な問題と、pre・pre 春、pre 春ともに道を間違えた leader への不信から引き返すことになった。引き返す頃には、だんだんガスが晴だし、J.P.に着いてテントを張った時にはもう、完全に晴れ渡っていた。何だかもったいないことをしたが、余裕をもって谷川岳や越後の山々を眺められたのは良かった。その夜、今後の日程について話し合つたところ、天気が崩れたら、来た道に戻るのかと聞かれたので、もちろんと答えたところ、寺島に「拒否します」と強く言われてしまった。余程、白毛門の急坂を下りるのが恐いのだろうと思つたが、来た道に戻るのが一番楽なので、私は内心、絶対あそこから降りようと思つていた。

3/20 起床 5:00(雪)—8:45(曇)—出発 9:20(晴)—清水峠 10:20(快晴)—同発 11:00—七ツ小屋山 12:00—蓬峠 13:15

朝、雪が降っていたので、少々待ったが、好天となり、気持ちが良い。昨日途中まで行った道は正しかったようだ。翌日は天気が崩れるとラジオで言っているので清水峠の小屋泊まりにしようかと思つたが、そこから一日で谷川岳まで行くのは少々hard なので、蓬峠まで行った。気になる所は、七ツ小屋手前の窪地と山頂を越えた下りぐらいで、あとは天気も良いし、非常に楽である。谷川山頂付近だけ、少々傘がかかっているのは不気味であつたが、苦もなく蓬峠に着き、小屋の跡にテントを張る。

3/21(雪) 沈

予想通り、吹雪。午前中は小屋が風よけになっていたが、その後、風向きが変わり、もろにテントに雪が溜まる。どうも、雪かきして出来た壁と小屋の間にテントを張ったのが悪かったらしく、どんどん雪がたまっていく。日中は交替で雪かきをしていたが、夜はだれも出たくなかったのも、素知らぬふりをしていたが、顔と足にテントがせまって来る。そのうち、足の上に雪の重みがかかり、動きがとれなくなって来たが、外に出たくなかったのも、じっと我慢していたが、「もう限界です」と端で寝ていた古瀬が言ったのを皮切りに外へ出る。すごい吹雪だ。雪かきが間に合いそうもないので、小屋の反対側にテントを移した。外へ出たのが 21:00、テントを移して中でほっとしたのは、既に 23:00 であった。おかげで、今、テントのポールは曲がってしまっている。

3/22 (雪) 沈

昨日ほどではないが、一日中雪が降り続く。全員、帰りたいという気持ちが伝わってくるが、自分までそういうことを言っておしまいなので、ひたすら眠る。

3/23 起床 5:00—出発 7:00(晴)—武能岳 8:00—茂倉岳 11:00(曇)—谷川岳 13:15—天神平 14:30(雪)

やっと晴れた。雪の中からアイゼンなどを掘り出して出発。気になっていた武能の下りは膝まで埋もれるので歩きやすいが、急降下で下が見えず、どこまでが道か良く判らないので、ザイルを出す。50m ぐらい行くと、笹平が見え、ザイルをしまった。天気が良いと出発時は思ったのだが、どんよりしていて、やはり谷川岳の方面は傘がかかっている。茂倉まで登れば後は楽だと思い、なんとか辿り着く。山頂に着いた途端、反対側の斜面から吹き上げるものすごい上昇気流で目も開けていられない状態になった。ここから一ノ倉にかけては、雪庇が発達していつかつに尾根を歩くことが出来ない。膝ぐらいのラッセルをしながらトラバース気味に進む。先頭を代わって欲しかったのだが、強い風にあおられ、疲れた顔でついてくるので、仕方なく先頭を歩く。谷川岳と一ノ倉岳の中間のコルあたりに着くと雪の量も減り、尾根にはトレースも残っていて、ゴールは間近であると感じられる。谷川岳に着く頃にはみんなヘトヘトで、しかも視界が悪かったのだが、なんとかここまで予定通りに来たという満足感で、なぜか笑みがこぼれていた。天神平からの下りは予定外だったがロープウェーを使った。やはり、文明の力はすごい。

夏からほぼこのメンバーで山行を行い、春合宿は奥秩父にしようという案も出たが、谷川に来て本当に良かった。途中、二日の沈もはさんだことにより一層充実感が湧き、一年の総括にふさわしい山行であったと思う。(文責 天羽)

OB 曰く「ここにも馬鹿がいたかというのが正直な感想」だそうです。

◎淵沢。道産子。久々の女性部員。小柄な体からは想像出来ない程アクティブな奴である。沢登りの天才では思わせる名前であるが、その期待通り釜に先頭を切って(といっても後続はいない)飛び込み泳ぎを披露したかと思えば、今度は大胆な(恐〜い)滝登りをこなす。また「エグイぞ、エグイぞ」と奇妙な文句を一応吐き出すものの、自分ほどの荷を背負っては平気で歩き出す。高校山岳部でもこんなふうに登っていたのだろうか。こんな彼女でも知的な面を多少は備えているよう

で、高校時代は新聞部で鍛えた批判精神に更なる磨きをかけるため、弁論部にも顔を出しては討論で火花を散らし、今夏にはある目的のために中国へ飛ぶことを心に決めている。このように、紹介をしだすとますます過激さが増してきてしまう彼女ではあるが、かわいい面もあるのだろうと他の部員は空しい期待を抱いている。山での活躍を請う御期待。

◎笠巻。新潟市出身。時代の落とし子のような奴で、何か見ている楽しい。一松の一橋寮で新人狩りに巻き込まれ、「一松」で飲まされた後、どさくさの最中山岳部に捕獲された。それ以来というもの、那須で五月の猛吹雪にさらされ、練習抜きで岩登りを強いられたり、瞬く間にマルチクライマーと化してしまった。運命とは分らないものである。高校時代はサッカーで鍛えたらしく、その癖が残ってか、いきなり後ろ向きに山を駆け降りたりもする。こんな変人的な登山を見事にこなすのである。こんな型外れの彼であるから、興味は山だけにとどまることなく、雪訓合宿が終わったかと思えば、学期中だというのに今東南アジアを放浪している。ちなみに、受験が終わった3月にカルカッタを歩いていた奴はこいつしかいないだろう。山で発揮される彼の探究心と行動力を期待する。

(以上二名 文責 山内)

◎三谷聖哉。大阪府出身。説明会の時に、一番最初に来たのが彼である。高校生の時から一人で夏山を歩いて来た彼のお気に入りには槍、穂高という。また、その名前「聖哉」は、山好きの父親が聖岳から名付けたものだという。こんなことを書くと、まさに山男になるための男ではないかと思わせるが、実際は眼鏡をかけて、少しひょろとした男であり、ギャンブルを好む奴でもある。彼と一緒に山に行ったのは、まだ二回であるが、いずれの時も彼はバテると、「自分は後から行きますから、先に行って下さい」と言い出す。単独行のくせが出てしまったのだろうか。この願いに「ああ、そうですか」と答えて、先に行ってしまったら、彼は何時になったら来るか判らない、ということは自明のことであろう。しかし、部会にはほとんど毎回来て、しっかりトレーニングをしている。こんな彼のことだから、厳冬期の槍、穂高も、近い将来現実のものになるだろう、と期待をこめて予測したい。

(文責 田形)